

No. 1194

「ふじ」南極に向かう 130

— 東京・晴海 —

第18次南極観測隊を乗せた観測艦「ふじ」は11月25日午前、昭和基地に向け、東京晴海ふ頭を出航した。この日の晴海ふとうには家族や関係者約千人が隊員たちの見送りにかけつけた。

今回の観測隊はロケットを打ち上げて、超高層観測を行うほか、現在世界の関心を集めている南極の資源問題に対応しようと地学調査にも力を入れている。

海上自衛隊の演奏に送られ船体をゆっくりと南極に向けた。「ふじ」は今年末頃、氷海に着き、昭和基地に物資を輸送、現在越冬中の第17次隊を収容したあと来年四月に東京に帰ってくる。

ひとりでもできるよ 365

東京、町田市立忠生第1小学校、この学校の1年3組に全盲児の三村栄子ちゃんがいる。2人の先生の良き指導と37人のクラスメートの温かい友情に支えられて頑張っている。栄子ちゃんは昭和44年10月29日、東京・世田谷区で生れた。未熟児だったため、保育器で育てられているうちに間もなく酸素障害で網膜症にかかり、光を失った。

目は見えなくても性格の明るい活発な栄子ちゃんは幼稚園時代も普通の子の中で強く生きてきた。

両親の「普通児と同じ環境で育てたい」という強い願いから、町田市立忠生第1小学校への入学が実現した。入学式の日の栄子ちゃん、学校という新しい社会に第一歩を踏み入れた。幼稚園時代の遊びだけの生活から勉強が加わった、栄子ちゃんの顔には希望がみなぎっていた。

入学した当時はベソをかきどうしだったという栄子ちゃん。7ヶ月たった今では母親もびっくりするほどの成長をみせた。

衣服の脱衣、をはじめ、自分の身のまわりのこと、学校の予習復習もひとりでもできる様になった栄子ちゃんは学校に行くのが楽しくてしかたのない様子。近所の友達と姉に手を引かれて登校するゲタ箱から手さぐりで自分のクツを取り出し教室の自分の席にかけていく。最初のうち、物珍しそうに見ていたクラスメートもしだいにうちとけていった。今ではころがしドッチボールにも参加、クラスメートといっしょに元気に走り回っている。(国語の本を読む栄子ちゃん)

栄子ちゃんの使う教科書は担任の九鬼、竹中両先生の手作りのものレーズライターという特殊器具と点字の二本立てで行われる、ボールペンの先に左手を添えながらレーズライターの上をなぞりひらがなや数字を書く、絵は教科書どおりに布で立体化させて理解できるように工夫されている。教科書が進むにつれて、内容が多くなってくる栄子ちゃんの教科書作りは大変な作業だ。カタチでしか理解できないためすべて立体的になおさなければならない。

今年の夏休みにはひらがなで何時間もかかって先生に手紙を書いたという。たとえ目は見えなくても今の栄子ちゃんにはできないことはない。これからも懸命に生きて行くことだろう。